



Data

監督：白石和彌
 原作：柚月裕子『孤狼の血』（角川文庫刊）
 出演：役所広司／松坂桃李／真木よう子／江口洋介／滝藤賢一／瀧川英次／井上肇／音尾琢真／駿河太郎／中村倫也／中村獅童／竹野内豊／伊吹五郎／岡田桃子／

👁️👁️ みどころ

「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」。広島弁のこのセリフはインパクトがある。そして、阿南惟幾陸相役や徳川家康役から殺人犯役まで何でもござれの役所広司が、ひげもじゃ、サングラス姿でこう叫ぶと、更に説得力あり！

1974年の第3次広島抗争以降も加古村組VS尾谷組の抗争が続いたが、1988年の上早稲二郎失踪事件の犯人さえ挙げれば、加古村組は一斉検挙が可能。そう睨んだ大上刑事は違法捜査もいとわず、ヒロダイ出の若手巡査をバディに懸命の捜査を！

しかし、大上には「ある秘密」が……。それが暴かれる中、ついに加古村組VS尾谷組の激突が起き、大上も行方不明に。しかして、本作は如何なる結末を……？

女性作家の原作とは思えない「警察小説×仁義なき戦い」をヤクザ映画の東映(?)が総力をあげて映画化した本作は必見！今後シリーズ化も必至だから、第2作でのヒロダイ君の成長と変身に期待！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■東映のヤクザ映画だが、主人公は警察官！■□■

本作のパンフレットには、「東映 警察・実録やくざ映画クロニクル」がある。これは、パンフレットにある、春日太一（映画史研究家）の『アウトローの東映』を取り戻せ！』とともに必読！

1960年代に『人生劇場 飛車角』（63年）等から始まった東映ヤクザ映画は、70

年代の『仁義なき戦い』シリーズ、80年代の『鬼龍院花子の生涯』等、そして90年代の『極道の妻たち』へと発展的に引き継がれたが、21世紀に入るとヤクザ映画は減少し、東映ビデオで細々生き残るだけになっていた。そのため近時は、本作を監督した白石和彌監督の『凶悪』（13年）（『シネマ31』195頁）、『日本で一番悪い奴ら』（16年）や、北野武監督の『アウトレージ』（『シネマ24』88頁）シリーズ等に限定されていた。

そんな中、本作が大きな話題性をもって公開されたが、役所広司演じる本作の主人公、大上章吾はヤクザではなく、警察官。しかも、広島県警の巡査部長という地位で、長年ヤクザ担当をしている「悪徳警察官」だ。そう考えると、本作をホントに東映のヤクザ映画と言えるのかどうかが大問題だが、残念ながらその点の議論はあまりなされていない。アメリカでは、クリント・イーストウッドがアウトローの暴力的警察官ハリイ・キャラハン刑事を演じた70年代の『ダーティハリイ』シリーズがあるが、これは絶対にヤクザ映画ではない。そう考えると、本当に本作を東映ヤクザ映画と呼んでいいの？

■原作は？シリーズ化は？■

私は本作の原作『孤狼の血』が女性作家、柚月裕子の手によるものだと知って、ビックリ。原作は読んでいないが、女性の目や女性の体験でよくここまでヤクザと警察の本質(?)に迫った「警察小説×仁義なき戦い」と称される小説を書けたものだと感心。パンフレットによると、それまでの柚月裕子作品が敏腕弁護士活躍を描いた「佐方貞人」シリーズをはじめ表舞台の物語で人気を博してきたのに対して、2015年8月に単行本として刊行された同原作は一転して、暴力団同士の抗争とそれを阻止せんと立ち向かう悪徳警官との攻防戦という、いわば「日陰の正義」の物語にはじめて挑んだらしい。なるほど、なるほど。そんな原作の特徴は①登場人物たちの鮮烈な生き様②リアルなディテール描写③息もつかせぬストーリー展開という、多角的な魅力をはらんだ圧倒的なエンターテインメント性でいっぱいらしい。私が見たところそんな特徴は、白石和彌監督の手によって映画でもしっかり活かされている。

そんな2015年の原作がいかなる経緯でこんなに早く映画化に至ったのかについては、パンフレットの中の「柚月裕子×白石和彌監督」に詳しいので、それも必読。なお、それによると、本作で大上の相棒として登場する「ヒロダイ（広大）」こと日岡秀一（松坂桃李）のその後を描いた第2作目が『狂犬の眼』というタイトルで誕生している上、大上の若い頃の話を描いた第3作が『暴虎の牙』というタイトルで既に新聞連載されているとのことだ。それを聞いた白石和彌監督は「たいへんだ。映画も三部作で考えないと（笑）」と語っているので、今の勢いでいけば、松竹の山田洋次監督の『家族はつらいよ』のシリーズ化に続いて、東映でも「ヤクザvs警察」路線のシリーズ化も必至！？

■本作の決めゼリフと凹凸コンビをどう考える？■

役所広司は、『日本のいちばん長い日』（15年）における阿南惟幾（あなみこれちか）陸軍大臣役（『シネマ36』16頁）から近時の『関ヶ原』（17年）における徳川家康役（『シネマ40』178頁）、そして『三度目の殺人』（17年）における殺人犯役（『シネマ40』218頁）まで何でもござれの万能役者だが、本作ではひげもじゃでサングラスというおおよそ警察官らしからぬ格好で、「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」とのたまう「決めゼリフ」がウリ。予告編やTVのコマーシャルでそれを見た人は、本作で大上が手数料（交通費）と称して平気でヤクザから「金一封」を受け取るシーンや、さまざまな暴行シーン、そして放火、住居侵入、窃盗という違法捜査まで堂々とやっつけてのける姿に唾然とするはずだ。このハチャメチャぶりは、ダーティ・ハリーをはるかに超えていると言わざるをえない。さらに、呉原金融の上早稲二郎（駿河太郎）の妹・上早稲澗子（MEGUMI）の取り調べでは、「ガミさんは女の取調べはいつも2人じゃ」と同僚が日岡に教えておろだが、その取調べ終了後にズボンのベルトを締め直している姿や、パチンコ屋での「一発抜いた後のパチンコはよく入る」とのセリフを聞いていると、これもハチャメチャ！

今の日本国では、財務省や外務省の高級官僚＝国家公務員のあり方が問題にされ、一部マスコミの目の敵にされているが、市民に身近なはずの呉原東署にこんな警察官がいるのは如何なもの・・・？他方、広島大学を卒業して広島県警に配属されたのが日岡秀一だが、キャリアを目指すはずのこんな男がなぜ呉原東署で大上のパディにされたの？彼の空手の腕前はなかなかのものらしいが、いくら何でもヤクザが刑事かわからないような大上のパディが日岡に務まるの？大上が日岡に最初に与えた仕事は、パチンコ店内でチンピラヤクザに対して「因縁をつけてこいや！」というもの。「ボコボコにされそうになったら助けてやる」との言葉を信じて日岡はその最初の仕事に挑んだが、さてその結末は・・・？

冒頭の養豚場のシーンでは吐きそうになったが、本作には白石監督流のそんな面白い演出がたくさんあるので、それはそれとしてしっかり楽しみたい。しかして、「警察じゃけえ、何してもええんじゃ」の決めゼリフを、日本の警察庁、そしてすべての警察官はどう考えるの？

■□■中東も朝鮮半島も本作の抗争と同じ？■□■

トランプ大統領と金正恩による米朝会談は6月12日にシンガポールで開催されることが決まったが、朝鮮半島の非核化やミサイル問題はどうか？また、トランプ大統領の決断によってアメリカがイランの核合意から離脱したが、これによって中東情勢はどう変わるの？また、米大使館を商都テルアビブから首都と認定したエルサレムに移転したことにパレスチナは猛反発しているが、イスラエルとパレスチナの関係はさらに悪化するのでは・・・？

本作は、1988年に発生した呉原金融の経理担当者、上早稲二郎の失踪事件から物語がスタートするが、その背景は1974年の第3次広島抗争。つまり、広島県の仁正会（五

十子会・加古村組の上部組織)と尾谷組との抗争が根本問題だ。そして、後半からは大上とクラブ梨子の美人ママ、高木里佳子(真木よう子)の「一身上の秘密(?)」が明かされる中で、ついには「大上の失踪」というクライマックスに至るが、その間もずっと加古村組と尾谷組の抗争は続いていく。そう考えると、本作にみる加古村組と尾谷組の抗争問題も、中東や朝鮮半島での抗争問題も、根は全く同じだと考えざるをえない。

若さ(バカさ)と勢いだけが取り柄の若手組員たちの行動を見ていると、『ウエストサイド物語』(61年)で見たジャック団とシャーク団の若者たちの行動と同じで、その喧嘩っ早さにはビックリ。とりわけ分かりやすいのは、尾谷組のシマ(縄張り)にあるクラブ梨子に加古村組の連中が現れ、ママやホステスたちにさまざまなサービスを強要している姿に、梨子の若いつばめである柳田タカシ(田中偉登)がキレてしまう姿。そのため、店がハネた後、タカシはたった1人でナイフを持って、クラブ梨子にやってきた加古村組の組員たちに立ち向かったが、たちまち逆襲されたうえ、フィリピンから密輸してきたばかりという拳銃の試し撃ちで一発アウトに。これに怒った里佳子が大上と仕組んだ吉田滋(音尾琢真)へ見せるラブホテル内での「濡れ場」ならぬ「復讐劇」は本作中盤の1つの見ものとなる。つまり、吉田の「イチモツ」に埋め込まれた自慢の真珠を素人の大上がメスで切り取る手術(?)はかなりの見ものだから、それはあなた自身の目でしっかりと!

■□■この証拠さえ挙げれば一斉検挙!しかし・・・■□■

本作中盤では大上と、尾谷組の若頭・一之瀬守孝(江口洋介)や現在鳥取刑務所に服役中の組長・尾谷憲次(伊吹吾郎)との過度の「親密性」が目についてしまう。一之瀬たちが加古村組の横暴を我慢しているのは、大上が加古村組を壊滅させてくれると信じているからだ。大上は、上早稲二郎失踪事件を起こしたのが加古村組だという証拠さえ挙げれば加古村組を一斉検挙できると信じていたから、懸命にその証拠集めを続けていたが、今や我慢の限界にきた一之瀬から認められた猶予期間は3日間だけになってしまった。こうなれば、今まで以上に違法捜査をいとわずに証拠を挙げるしかないと考えた大上は、前述のとおりラブホテル内で吉田を締め上げたわけだが、それによって得られたヒントを結びつけていくと、ついに・・・。

ある孤島の土の中に埋められた上早稲の死体を警察犬の誘導によって発見し、それを掘り当てていく作業にも、冒頭の養豚場のシーンと同じく吐き気を催したが、この成果に大上は大満足。広島県警と呉原東署は遂に逮捕状を取り、加古村組の一斉検挙を行ったが、折悪しくそこで大上の「ある過去」を探って安芸新聞社の高坂隆文(中村獅童)が動き始めたため、大上は謹慎処分を受けてしまうことに。尾谷組と加古村組の双方に顔をきかせて抗争を止める役割は大上しかいない。しかし、大上が動けなくなった今、それは俺がやるしかない。日岡はそう腹をくくって動いたが、しょせん日岡では「子供の使い走り」に過ぎず、ついにある日、尾谷組は加古村組を襲撃。一之瀬は見事、会長・五十子正平(石

橋蓮司) のタマをとったが、さあ、その結末は・・・？

■□■意外にも大上は筆も達者？大上は死して何を残すの？■□■

昨今のプロ野球では「二刀流」の大谷翔平の大リーグでの大活躍で持ちきりだが、かつては野村克也のID野球を支えた「野村メモ」が有名だった。今では大谷の投球も打球もすべてパソコンに入力されて分析されているが、そんなものがなかった時代は、手書きの「野村メモ」と、野村克也の頭脳が絶大な威力を発揮したようだ。しかして、警察官として公私にわたってハチャメチャな生活を続けている大上も、家に帰った後は1人で反省し、モノを書く習慣があったようだから、えらい。

5月13日に観た『モリーズ・ゲーム』でも、主人公のモリーが秘かに主催しているポーカールームへの参加者の名前や掛け金の動きは極秘が前提。したがって、たとえポーカールームが違法賭博(=賭博場開帳等図利罪)だとしてFBIに摘発されても、主催者のプライドにかけて、モリーが自分のポーカールームのパソコンデータを提出しなかったのはえらい。普通は、それを提出すれば無罪放免だと司法取引されると応じてしまうものだ。

しかして、本作で大上が「第3次広島抗争」以降の尾谷組と加古村組の捜査メモをつけているであろうと踏んだのは、広島県警上層部の監察官・嵯峨大輔(滝藤賢一)。そして、本作途中からは、日岡を大上のパディにしたのはその「大上メモ」を入手するためだったことが明らかにされていく。しかし、エリートでキャリア組に進むべき日岡が、なぜそんな役割を引き受けたの？また、尾谷組と加古村組が激突する中、忽然と大上が姿を消したのはそれなりの必然性があったはずだが、そこで広島県警や呉原東署はどんな動きを？

これ以上本作のクライマックスに向けての動きをネタバレするわけにはいかないが、とにかく本作後半からは「野村メモ」ならぬ「大上メモ」がストーリー展開の軸になっていくので、それに注目！きっとその中には警察上層部の腐敗ぶりが書かれているのだろうと予測はできるのだが、その爆発力の大きさは・・・？

■□■次作の主役はヒロダイ君！その成長と変身に期待！■□■

本作で大上から「ヒロダイ、ヒロダイ」と揶揄される広島大学出身のエリート巡査・日岡は、本作では全編、何でも表に出てしまう大上の引き立て役に甘んじている。そのため、大上が行方不明になって日岡がその代役を果たさなければならない時に、それができなかったことに、日岡はカリカリ！しかし、この時点での日岡の能力は所詮この程度だろう・・・。

大上がいらない部屋に入り込むと、万年床だが、その中は意外にキレイ。そして、そこで日岡が発見した大上の“手記”をめくってみると、そこには・・・？日岡はヒロダイ出のエリートだけに、そこからの発想転換が早い。俺は今まで一体、誰のために何をしていたんだ！？俺の直属の上司は監察官の嵯峨警視正だが、その上には更に副本部長の岩本恒夫警視長(井上肇)がいる。彼らは1974年の広島抗争をどのように捉え、大上が持つて

いるはずの「ある秘密」についてどのように考えていたの？

「野村メモ」ならぬ「大上メモ」を読んだ日岡は、一瞬にして上層部の不正を含むすべての“からくり”を悟ったようだ。そう居直ることができる、日岡のような若造でも急に強くなるからすごい。いきなり今日から大上のようにひげもじゃ、サングラス姿とはいかないが、今後はきっと周りの目や声を一切気にせず、肩で風を切って歩きながら、独自に必要な捜査を進めていくに違いない。すると、きっと袖月裕子原作の続編たる『狂犬の眼』の主人公となるはずの日岡は、大上と同じように「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」とのたまっているはずだ。

若手のイケメン俳優のトップ・松坂桃李は、前作『娼年』（18年）では女性専用のコールガールの“娼夫”として、ある女性の良き指導とさまざまな体験を経る中で大きく成長していったが、本作では大上の指導と様々な体験を経る中で警察官として大きく成長していくことに。本作ラストでは五十子会の会長は殺され、そのタマをあげた尾谷組の一之瀬は自分の思惑外れのまま逮捕されたことによって、加古村組VS尾谷組の抗争は終了したかに思えたが、これはあくまで表面ヅラのこと。小さくは「クラブ梨子」の利権、大きくは広島全域の利権をめぐる、両組織の抗争は続くはずだ。しかして、「暴対法」等を武器として、ヤクザから市民の安全、安心を守るべき呉原東署の暴力対策課の一員として、日岡は第2作ではいかなる活躍をするのだろうか。第1作の体験はホントに貴重だったはず。彼の、次作での成長と変身を期待したい。

2018（平成30）年5月17日記